

33 九州における近代整形外科の祖、 住田正雄の生涯

○小林 晶・長門谷洋治¹⁾

九州大学医学部(当時京都帝国大学福岡医科大学)に整形外科講座が、明治四十二年五月二四日に創設されたのは、東大、京大に次いで三番目であり、本年(平成十一年)は九十周年目を迎える。初代教授は住田正雄であるが、これまで顧みられることの少なかった、波乱に富んだ彼の生涯について述べる。

彼は明治十一年三月二七日当時の兵庫県津名郡江井村垂井(現一宮町江井)で、代々回問屋で産をなした八代目金作を父として十人兄弟の四男として出生。母きぬは別所家の出身で、遠くは別所長治(天正年間)に、近くは東大整形外科三木威勇治(第三代目教授)に繋がる家系である。明治三五年十二月東大卒業後、外科の佐藤三吉教授に師事した。最初の論文は同三七年「神経学雑誌」に掲

載された「稀有なる脊椎破裂症の一例」である。東大時代はこの他四編の報告があるが、外科関係と整形外科関係が相半ばしている。

同三九年八月京都帝大福岡医科大学助教授として赴任し、外科学第二講座を分担、後に助教授のまま講座担当となる。九大における最初の論文は同四一年の「クロロフォルムの有害後作用に就いて」である。同四一年九月より文部省より海外留学を命じられ、主としてドイツに滞在、特に Leipzig の Erwin Payer 教授のもと、二年間関節強直に対する授動術の実験的研究に精力を注ぎ、後に生涯を通じての研究テーマとなり、伝統的に九大整形外科のお家芸となった。授動術については六十ページにおよぶ独文の他に、十七の論文が残っている。同四五年六月帰国、翌月九州帝国大学医科大学教授に任じられ整形外科講座を担当、時に三四歳であった。

どの講座でも草創期には困難を伴うが、整形外科には最初入院病棟がなく、総長の許可で市内の私立三病院を使用し、入院治療を行った。大正五年ようやく病棟が割り当てられて、この制度は停止された。これが後のいわ

ゆる特診事件の一因となったと考えられる。

その後教室の業績は年々増加するが、活躍の舞台は主として日本外科学会であった。住田は第十五回総会では「関節結核」、第二六回では「脊椎カリエス」の宿題報告を担当する。第二五回では会長となった。第十五回総会のとき、東大まで出向き関節授動術の手術の実際を供覧し、鮮やかで流れるような手捌きを皆に示している。整形外科は運動器外科学、人体力学、奇形学の三部門からなり、外科学の大道は整形外科であると主張し、整形外科学会の創設には参加しなかった。

大正十四年七月十八日の地元新聞は、いわゆる九大特診事件について、最初の報道を行った。以来、医学部内、周辺の旅館、市内・市外の関連入院施設、車夫までが司直の取り調べの対象となり、数人は収監された。市民大会も二回開催され、政党の議論にまで進展するに及んで、同年八月十七日付けで住田を含む三教授、一講師、一助手の依願免官の形で事件は收拾された。以後も訴追の動きが高まったが、そのまま決着した。私見ではこの事件の発生、経過は、医学部独特の診療の問題、西欧の教授

の慣習、市民感情のエリートに対するわだかまり、スケープ・ゴートの摘発、大正デモクラシーが底流にあったことなどの要因が重なったものと考ええる。

住田は失脚後、大阪市東区北久太郎町（現大阪市中央区役所前）で、昭和二年二月に開業した。名称はあくまで「住田外科病院」であった。臨床的研究も発表し、同十二年の第一回日本臨床外科学会では「骨および関節の結核について」と題して、特別講演を行っている。しかし、昭和二十年六月一日の大空襲に罹災、京都に隠棲した。このとき既に、夫人に先立たれ、四人の子供の内三人は夭折し、残る次男も同二十年三月比島で戦死するという三重の不幸に見舞われて、昭和二十一年一月二一日孤独の中で逝去した。享年六七歳であった。墓は郷里の法華寺にある。

（蒲原宏先生の御教示に感謝いたします）

（1）福岡整形外科病院

（2）長門谷皮膚科